

# サン＝シモン「新キリスト教」への一解釈

富 岡 勉

## 目 次

1. 序
2. サン＝シモンの思考の変遷
3. 「新キリスト教」への道
4. 道徳的思考
5. 一解釈——福音的思考
6. 結 語

## 1. 序

少なくとも日本においては科学的社会主義と認めている側の人々からは、「空想的」という名のためであろうか、ほとんど十分な発掘もされないまま今日まで等閑視されてきているサン＝シモンの研究を、ことさら改めて続けることは一見徒労に思えるようであるが、社会主義国の現状を知らされたり、社会主義諸国間の国際的関係を眺めるにつけ、ドイツ古典哲学やイギリス古典経済学とともに、フランス社会学、とりわけ、サン＝シモンを今一度考え直す必要がありはしないかと思えるのである。マルクスがサン＝シモンを「空想的社会主義者」ときめつけたことがらや、今日の社会主義諸国のわれわれに示してくれる現象的なことがらなどからマルキシズムを反省するとき、なにか類似的な諸点が現われつつあるように思われるからである。

また一方、日本におけるキリスト教界を眺めてみても、社会主義者という枠内にサン＝シモンを留めてしまっているためか、あるいは道徳的思考者にすぎないとしているためか、それとも神学的にはなんら問題とするに足りないのか、とにかく殆んど省みられていないのは何故であろうか。こういうことの反省からも彼を再考する必要はないかと思えたので小論をまとめた次第である。

サン＝シモンは波乱に富んだ一生を送り、貴族出身でありながら時勢の先を読むことに敏であったのか、フランス革命を前にして伯爵の称号を返上し、革命側に立った宣言文案を起草することによってギロチンの露と散ることから逃れ、貧困の中でのピストル自殺も不成功に終って最後は弟子に見守られながら一生の幕を閉じたのであるけれども、彼の思想も起伏の多い、時にはヒステリックにさえ感ぜられるものもあったようであるけれども、彼の思考そのものは最後の著作「新キリスト教」にいたるまで、途中では大転換をしているように見えるけれども、思想そのものは当初からの「人類の福祉」のためにということで、一貫して変化していな

かったのではないかと、内容を追って小論を進めてみたいと思う。彼は科学研究を標榜したにもかかわらず、彼の思考の中に人間性を温かく求めたためであろうか、このことが空想的とみられた原因ではなかったろうか。

また、彼の思考の移り行きを求めつつ、それが次第に「新キリスト教」へとまとまりを見せ、「新キリスト教」において彼の思考内容としての思想が集大成されるわけであるけれども、この「新キリスト教」が宗教であったのか、また、道徳であったのか、彼がどのようにキリスト教を把握していたのか、をも追求し併せてある一つの解釈がなりたないものかどうかを求めてみたいと思う。

## 2. サン＝シモンの思考の変遷

サン＝シモンの思想を形成している第一のルートとみなすことの出来るものは、ニュートンの物理観であろう。ディドロやダランベールを師とした彼は、思想的には百科全書派の洗礼を受けたのであるから、当然彼の考え方には科学的なものが優位を占め、社会の諸現象の理解に、また人間の理解に、科学的思考を導入するようになったのも不思議ではない。そしてとくにその中でも彼は数学者を最右翼に位置づけた。共同社会における社会的地位も、科学者を指導者とすることを主張した。「ジュネーブ人への手紙」(Lettres d'un habitant de Genève à ses contemporains) では、数学者は彼によって高貴な地位を与えられていた。それというのも、統計や計算を社会に巾広く適用することによって、社会科学の研究や人間と社会とのかかわりあいの解明に、彼らは重大な役割を演ずることになるであろうとサン＝シモンは思ったからに他ならない。人類のために働く美しさ、その目的の高貴さを賛え、<sup>1)</sup> その第一線を行くものとして数学者・物理学者を遇したのである。しかし彼らはサン＝シモンの期待にはそい得なかった。彼らは自己の研究成果を社会へ適用出来なかったのみならず、時の権力からの愛顧を受けることに汲々とした。象牙の塔の中だけの研究にとどまって社会への貢献度が低いとみなされた。「ジュネーブ人への手紙」から10数年後の「人間科学に関する覚え書」(Mémoire sur la science de l'homme) において、サン＝シモンは彼らを攻撃し追放してしまった。<sup>2)</sup> 人間社会を秩序建て平和を樹立するためには、彼らはなんの役にもたたなかったと怒り、諸民族の利害を調整する道を発展させるであろうと彼らの研究の上に期待をかけたけれども、彼らはいたづらに権力者に取り入ることにのみ精力を傾けて、サン＝シモンの思いを裏切り、道徳的危機を救うことすら出来ないばかりでなく、逆にヨーロッパ社会を危機に導き平和に脅威をさえ与えつつある権力者達に追随し、彼らに奉仕する姿さえ見せた、と怒りをぶちまけた。

しかし、サン＝シモンはこのようなことで科学的思考を捨て去るような浅薄な思想の持主ではなかった。彼は次に社会的指導者としての資格の座を、数学者・物理学者から生理学者・心理学者へ移すようになった。これが彼の思想を形成している第二のルートである。これは、社会科学として取扱う社会現象が生物学的現象により近く、数学者・心理学者よりも生物学者・

生理学者・心理学者の方が社会の科学的究明にはより適切である、と彼が判断するにいたったからに他ならなかった。サン＝シモンにとっては18世紀の社会は数学的機械論的であり、19世紀の社会は進化論的であると判断されたのであろう。社会科学を静的把握から動的把握の途へ移行させるようになったとも言えよう。彼の進化論的社会考察は歴史的社会究明につながって行く。社会の在り方や人間の行動状態や思想を、単にその時々現象として把握するだけでなく、その進行発展状況や因果関係を、歴史の中で科学的に考えて行くことになるからである。したがって、歴史過程の中でその時代に生きる人間は自己のおかれている位置を認識し、どのような行動をとるのが正しいか、どのような思想の持ち主となるべきかを適格に見出すことが、彼にとっては道德的であった。歴史の流れ行く方向を見究め、歴史に逆行するような行動や思想は不道德とみなしたわけである。

サン＝シモン自身は深く意識していなかったと思えるが、この進化論的・歴史的社会考察において、彼は弁証法的に思考を回らせている。社会の歴史を、一般化→特殊化→高次元一般化、あるいは、総合→分析→高度総合の図式で把握している。彼は高次元一般化の時代、高度総合の時代の到来を期待し、またその到来させるべく啓蒙したのである。当時の権力者達とその追従者達は、特殊化の時代、分析の時代の晩鐘を耳にしようとせず、沈み行く太陽を自分達の力で何とか食止めて、何時までも太陽の空高く輝くことを望み、新しい朝日の昇り初めに従った新しい行動をとることを拒否していると説いた。

このように社会を進化論的・歴史的過程の中で考察しようとするとき、フランス革命後の混沌としたギロチンの恐怖におののき、しかもカトリック教会や旧貴族が序々に勢力を盛り返して来た時代に、歴史の流れに沿った道德行為とはどのようなことであろうか。彼をして言わしむれば、教皇の権力に屈してその愛顧を求め恵みに預ることではなしに、社会全体から見れば一部分にしか過ぎないが権力的には威力的である特権的存在者に抵抗し、その思想と行動をかけることが道德的行為である、ということである。

ア・ポステリオリの時代、分析の時代、特殊化の時代の終末期に、道德的行為は人類の発展と福祉に努力することであって、特権階級の豊かな生活を維持することではないのであった。大多数の民衆が豊かに生活出来る道を発掘することに他ならない、と彼は説いたのである。それでは具体的にどうすることであつたろうか。それは科学主義的産業を旺盛にし、人類の物質的生活の向上を促すことであつた。科学主義を産業に大いに導入して産業主義を前進させることを道德的行為とみなした。一般大衆の生活に対する基本的要求の充足こそが歴史の流れに沿った道德的行為であり、これを阻害することは歴史の進行を逆行させる不道德的行為と彼の目に写つたのである。

産業社会の形成が人間の物質的欲求の充足を果し、地上に「樂園」を創り出すことになると考えたのであるから、このような産業社会では、科学者や産業者、その中でもすべての人間の精神面において、また、物質的福祉面において大きく前進させ発展させることの出来る能力があり、またそうしようとする情熱のある者こそ、指導的役割を担当するに適当な人物であると

した。<sup>3)</sup> 彼の思考の中での物質的欲求の充足は、一民族や一階級にとどまる問題でなかったことは、彼が「人類の福祉」を唱えたことから判断出来るであろう。したがって、彼の「道徳的」とは、自分達の所属する民族の産業における生産能力を増大させるだけでなく、他民族の生産能力をも増大させることに協力し、また、生産活動を重要視させるよう啓蒙宣教することであった。

サン＝シモンは能力と権力を区別した。権力は他人を服従させたり他人に強制したりする力であるから、これに反抗や対抗する力も逆に持つ者も出て来る。したがって、内部的抗争や斗争の生じることも避けることが出来ない。しかも権力者は何時までも強制したり服従させておきたいという願いから、世襲的移譲になりがちである。古代的体制も中世的体制もそうであった。能力は世襲的であることは不可能であるし、また力によって獲得することも不可能である。それは各人の働きであって仕事の出来る力であるからである。科学の社会や産業の社会では権力は通用しない。能力のある者がエリートとしてその自然的素質と研究と努力ゆえに重要な役割を演ずることが出来る。階級・身分を超越したものである。「能力に応じて働き、能力に応じて得る」という言辞は、マルキシズムの独占的言辞でなく、実にサン＝シモンが生みの父である。彼の考えはだからと言って機械的平等主義でもなく、無階級主義でもなかった。能力にもとづいて生じてくる自然的階級——産業的平等 (*égalité industrielle*) ——を認めたのである。現在の資本主義社会においては、資本家は国際的競争市場において国家を大いに利用し、自己の利益の増大を計ろうとするけれども、サン＝シモンの考えていた産業社会においては権力が否定され、能力者が指導的地位を得る社会であるから、産業者は「人類の物質的欲求の充足」という同一の利害を追求しているので、自己の所属する民族や国家はもはや問題でなく、人類全体が対象となってくる。もっとも、サン＝シモンの人類とか全世界という場合は、ヨーロッパが中心であったようであるけれども。したがって、彼にとっては国境は問題でなく、「国家の崩壊」もしくは「国家の消滅」も彼の思考の中から産声をあげたものである。

産業社会においては権力斗争は考えられず、平和的社会であると考えられたので、彼はむしろ別な二つの部類の斗争を想起した。それは非生産的な部類に属する者と生産的な部類に属する者との斗争である。非生産的な部類に属する者とは、少数者でありながら権力を把握していた貴族・僧侶・軍人などであった。彼らはフランス革命によって打撃を受けたけれども王政復古と共に再び勢力を得、権力の奪回を計りつつあった。生産にたずさわらないで、権力を掌握し支配的地位にあることは、サン＝シモンにとっては不道徳的存在として我まんならなかった。時代逆行的存在であり歴史過程を阻害する生産防害者であり、怠惰者で生産者の納める税金を食い物にする寄生者 (*hommes parasites*) であり、寄生者が宿主を支配することは逆立ちした社会であった。

生産的な部類に属する者——生産者階級＝産業者階級 (*classe industrielle*) ——は、彼によれば銀行業者 (*baquiers*) を含んだ巾広いものであったが、彼らは自分自身のためにも生産を行うけれども、全人類のために生産を続けていることであって、人類の物質的基本要求の充

足のために貢献することになり、歴史の過程でその流れに奉仕する道徳的行為者であった。

1821年頃になってサン＝シモンは、自己の主張する科学主義・産業主義の広報活動に戦術転還を迫られたのではないだろうか。一般社会は彼の意図するところの理解が充分でなく、彼の目標とする「地上の楽園」の達成も促進しないため、一步後退二歩前進の姿勢に傾いた。時流に壁の如く立ちはだかっている権力と正面切って争うことの力の浪費と、効果の少いことを自覚し、別な斗いの姿勢をとり始めた。これが彼の思想の形成の第三のルートである。偉大な権力を以って君臨するカトリック教会に真正面切って対抗する愚かさよりも、キリスト教信仰に同調しながら、教皇を中心とするカトリック教会の指導する信仰の在り方と、サン＝シモンの説くキリスト教信仰とを対比することによって、カトリック教会が如何に誤って伝道をしているかを浮彫りにして、彼のキリスト教信仰がいかに道徳的であるかを宣教することに方向を転じていった。これが「新キリスト教」(Le Nouveau Christianisme)として彼が世に問うところのものである。

(註)

- (1) Lettres d'un habitant de Genève a ses contemporains, in Oeuvres XV, 14.  
The New World of Henri Saint-Simon by F. E. Manuel Part I 4, p. 65.
- (2) Mémoire sur la science de l'homme, in Oeuvres XL, 39-4 Manuel, ibid. part II 10, p.138
- (3) サン＝シモン「産業者の教理問答」世界の名著 続8 中央公論社 p. 305

### 3 「新キリスト教」への道

サン＝シモンはカトリック教会と対抗するためにキリスト教に入信したと見るべきだろうか。そのように見ることは正しくないように思われる。彼は元来フランスの帯剣貴族の出身であったから、幼少の頃からカトリック信仰の家庭環境の中にあったはずである。したがって、キリスト教信仰の生活態度は自然と身に浸み込み、口から出る言葉の端々に聖句が伺えるのは当然であると言えよう。これらのことから見ても、彼の思想の根底にキリスト教の影響が相当入り込んでいたことは言うまでもないことであろう。宗教、あるいはキリスト教を彼は否定しないが、カトリック教会の在り方に怒りをかくすことが出来なかった。教皇や僧侶達が非生産的存在にもかかわらず権力を握り、貴族・軍人と一体となって国民の税金の無駄使いをしていることに、我まんがならなかったのである。

フランス革命に便乗したと見られた土地の売買投機による収益と、貴族出身というレッテルとの理由から抹殺されようとした間に、彼は人間相互の憎悪の復しゅう心の恐ろしい姿を経験した。崇高な市民革命のかげに潜んだ個人的不信・憎悪・嫉妬・陰謀など、人間の内的欠陥のみにくさと恐ろしさを充分経験せしめられた。彼は自己のキリスト教信仰の証を1810年に甥に当るヴィクトル・サン＝シモンに宛てた手紙 (Epître dedicatoire à mon neveu) の中で次のように記している、とフランク・E・マニユエルは述べている。

無神論であると非難した「皮相的で迷信深い精神」をもった者たちを沈黙させるために、サンシーモンは彼の信条を公表した。「皇帝の法廷へ、わたしは彼らを召喚しよう。王座の足もとで、彼らは信仰告白をするわたしの言葉をじっと聞くであろう。わたしは神を信じる。わたしは、神が引力の法則にこの世を従わしめられたことを信じる。」これは彼の正統派信仰の公開告白であった。<sup>4)</sup>

フランス革命の火がまだ充分消え去っていない1790年代に、郡会が立憲議会に送った貴族的特権の廃止を要望した覚え書の中では、彼は創案を練り筆をとって、

永遠者が、その形に似せて差別することなくわれわれすべてを創造し給うたことを思いおこさせる偉大な実例を、この世に対して2500万の人々が示している時に……と記したともいわれている。<sup>5)</sup>

カトリック教会の大きい権力と闘うことによって、自己の思いを貫き通せないことを痛感させられるにつれて、彼のキリスト教信仰を直接外部へ表現する場合が次第に多くなり、後年の著作に至るとキリスト教とその道德の強調が深まってくる。「新キリスト教」の前身ともいわれる「産業者の教理問答」(Catéchisme des industriels) においては、「新キリスト教」への玄関口として、度々キリスト教に対する対話が出てくる。たとえば、第一分冊において対話の要約の中に、

神の道德と人間の道德は、あらゆる種類の能力において最も傑出した人々に、産業体制の組織化をその細部にわたって行なうため、また一般社会に産業体制を実施させるために、彼らの努力を結合することを要請する、ということがそれです。<sup>6)</sup>

と述べている。これは「人類の福祉」のためにつくすという一点において能力者が用いられることは、権力によって能力者を指導者として選ばせるのではなく、神が備え給うたものを人間が自然に選び出すようになる、ということの意味してはいないだろうか。しかも、彼の思考は一国にとらわれた巾の狭い愛国心でなく、「人類の福祉」と救いを目指しているが故に、世界的な産業主義はキリスト教と相通じているとみなしたのではなかったろうか。「産業者の教理問答」第二分冊第二補遺において、

愛国心の思想を分析すれば、われわれは次のことを見いだします。愛国者とはその成員である国民社会にたいする情愛によって、あらゆる意識が際立っている人間です。それは、自分の全財産と全信用と国民の利益のためにいつまでも犠牲に供する人間です。……………

われわれはそれについて熟考したのちに、次のことを納得しました。すなわち、あなたがたは、博愛の感情、ヨーロッパ主義の感情、家族の感情が、結局、今日あらゆるヨーロッパ人において、彼らが味わっている国民的感情を押えている、ということを認めています。

われわれがいただいている道德的感情の最良の法典は、キリスト教道德のそれです。<sup>7)</sup>と記し、産業者こそが、キリスト教の願望をこの世において実現出来る可能性のある存在であると信じたのである。彼はさらに第二補遺において、

キリスト教は、現存する道德の最良の法典であると考えます。しかしわれわれは、この法典が完全なものにされる必要があると思います。……………

今日、全産業者階級が優勢となりましたので、福音書の著者たちの仕事を完成することは可能であり、また容易でさえあります。そしてそのことは、聖職者の政治的主張をおさえるただ一つの方法です。<sup>8)</sup>

と述べるにいたっている。

このようにして対話形式を続けながら彼は、「新キリスト教」へと進み、自己の思想を結集していくのである。

(註)

(4) Manuel, *ibid.* Part II 9. p. 128

(5) Manuel, *ibid.* Part I 2. p. 30

(6) 前掲「産業者の教理問答」P.334

(7) 前掲「産業者の教理問答」P.407,408

(8) 前掲「産業者の教理問答」P. 402

#### 4. 道德的思考

サン＝シモンの社会科学は歴史過程を通して社会を考察することであったから、歴史に沿うことが道德であり、歴史が道德であり、歴史が正義であった。そして彼によればカトリック教会の在り方は、歴史の流れを阻害する不道德なものとなった。神信仰において彼はカトリック教会の誤りを世間に問うたのであるから、彼の思考の中では、歴史に代って神が正面に出ることになり、神が正義として現われ、「人類の福祉」のために「人類を愛する」という一点に問題が集中されて来るようになった。

彼のいう人間愛には二つあった。「ジュネーブ人への手紙」を著した当時は自己愛が中心であった。アダム・スミスやベンタムの影響を受け、自己利益のために人間は行動するものである、という考えが強かった。各個人や各階級がそれぞれ自己の利益を守っていれば、調和と平和が維持出来ると考えていた。彼には、資本家や有産階級が「死の商人」となって自己の利益のみを考え、大衆の犠牲を強いるというようなことは、夢想だに出来なかったことであろう。有産階級は富の増殖に努力し、革命が勃発したり戦争が開始されることは、自己の財産を灰燼に帰する怖れがあるからこれらを極力避けようとするであろうし、無産階級の人々は兵士として戦場に送られて犠牲となって命を失うことを避けたいと願うであろうし、知識階級の人々は平和時にこそ自己の才能を発揮することが出来、また研究業績を世に認めてもらう機会が多いと、各々が平和を希求するであろう、と彼は考えたのである。

しかし、1821年頃になると彼の人間愛は、もう一つの人類愛へと移って行く。博愛・兄弟愛となって行くのである。個人や階級を超越して人は互に愛し合う情熱があり、困窮者を救いた

いという感情が湧き出るものである、と考えるに至った。「よきサマリア人」の情熱は、すべての人間を通して、個人・階級・人種・民族を超越して所有しているものである、と彼はみなしたのである。個人的な利害や階級的な利害に対する関心は、全く消え去るものではないけれども、これらは社会を新しく改革していく原動力となり得ない、これらを超越して人間が相互に救い合い助け合う人類愛・隣人愛の情熱こそ、社会改革の原動力と気付くに至ったのである。そしてこれこそ真のキリスト教の精神と一致していると見るようになった。彼は「人は互に兄弟として導き合わねばならない」(Les hommes doivent se conduire en frères à l'égard les uns des autres.)<sup>9)</sup> という聖句と人類愛の一致を見たのである。この実現のためには、世襲的で権力に依存している「門閥貴族」(l'aristocratie de la naissance) の能力では到底不可能で、「才能貴族」(l'aristocratie des talents)こそそれに適しい存在であると見たのである。

サン・シモンは産業者の教理問答」と同じような対話形式をとりながら、「新キリスト教」においては保守主義者 (le conservateur) と革新主義者 (le novateur) との対話を進めている。これも彼自身は意識していなかったことと思われるが、キリスト教思想の社会を弁証法的に三段階に分けて考えている。<sup>10)</sup> キリスト教が始ってから第15世紀に至るまでを第一段階として「一般化の時代」(générale) と彼は呼んでいる。この時代は特殊利益や特権者の利益は、一般的利益 (les intérêts généraux) とか大衆の利益より優先することはなかったというのである。才能貴族が門閥貴族より優位を占めていた時代である。キリスト教初期の僧侶達は神の教えの通り忠実に一般人類の福祉を願って活動し、博愛主義であったとしている。そしてこれは、隣人を兄弟として愛することになっていたというのである。

ところが「一般化の時代」がルターの宗教改革以来崩壊し、「特殊化の時代」(specialites) というアンティテーゼの第二段階に足を踏み入れるに至ったと見ている。人間が特殊性に心を奪われてしまった時代である。科学者は特殊な事実の研究のみに没頭し、社会は各階級の私的利益を増大することに専ら意を注ぎ、利己主義が旺盛となり、あらゆる階級や各個人を自己の支配下におきたいという権力欲・独占欲を助長させ、門閥が重要視される世になった。民衆の大部分を占める無産者が省みられることの少い時代となり、キリスト教精神からはほど遠い時代であり、キリスト教道徳が正しく受止められていない時代で、サン・シモンが現に生存している時代が正にその時代であるというのである。

彼の描く第三の段階は、第一の段階より一段と次元の高い「一般化の時代」である。この時代は人類全体が基本的願いとしている物質的欲求を充足させるべき時代で、そのため科学が重要視されて合理主義的であり、科学的産業主義によって生産が拡大され、互に人類が兄弟のように愛し合うことによって幸福達成の途が開ける時代であるという。生産にたづさわることで、他の人々を愛していることになるというのである。それは人々の物質的欲求の充足に貢献しているからである。

彼はキリスト教思想の社会を三段階に区分したけれども、彼の思考の段階も弁証法的である。百科全書派の洗礼を受けて数学者・物理学者を社会の指導者としようとしたニュートン教時代



が第一段階であった。しかし、数学者・物理学者の社会への適用能力不足により第二段階に踏み込んだ。これが産業主義であった。産業者によって人類の物質的基本要求の充足が可能となり、産業者こそその能力によって自然に社会の指導者として選ばれるようになるというのであった。しかし後年、これに宗教的・芸術的情熱を加えるようになった。これが第三段階の「新キリスト教」を唱えるにいたった。ここにおいて、「新キリスト教」という彼の最後になった著作の一点で、キリスト教思想の発展段階と彼の思考の段階とが一つに重なってしまうのである。

「社会における宗教的情熱の働きを明確にしようと試みること」(essayer de préciser l'action du sentiment religieux dans la société)<sup>11)</sup> がその目的である、と「新キリスト教」の緒言に述べているように、彼は自己の人生最後の思いを込めて、彼の思想の中に全思考を投入したのではなかったろうか。彼はキリスト教のこの世の目的として (pour but terrestre) 貧しい者の精神的・物質的生活を出来得る限り迅速に改善することを提唱し、また、イエス・キリストは最大多数階級の幸福を増進するように努力する人達に、永遠の命 (la vie éternelle)<sup>12)</sup> を約束されたのであると唱えている。さらに、真実のキリスト教は天上のみならず地上においても、多くの人々を幸福にしなければならない<sup>13)</sup> とした。これはつまり、全社会は最も貧しい階級の人々の精神的・物質的生活 (l'existence morale et physique) の改善に努力しなければならないことを意味しており、全社会はこの大目的を達成するために、最もふさわしく組織化されなければならない<sup>14)</sup> ということであった。

たしかにサン＝シモンは、キリスト教を社会科学の側面から眺めているといえそうである。また、キリスト教を道徳として把握したともいえそうである。彼は社会にとっては物理学や数学の知識よりもさらに重要な科学があり、それは社会を構成する科学であり、社会の基礎となるべき科学であって、これこそ道徳である<sup>15)</sup> と「新キリスト教」で述べている。彼はキリスト教を道徳的思考の対象としているようである。神の存在を認め、唯一の原理を認め、イエス・キリストの言葉を度々引き合いに出した。神の声に聞き従うことを最高の道徳と確認したと言えそうである。したがって、国家が最高の道徳でもなく、まして、国家のために生き、また国家のために死ぬことが最高の道徳であるとは考えなかった。サムエルの時代には国家はなかった。しかし、イスラエルは外敵に抗する軍事力と国防の劣勢、統治力の不足を怖れた敗北主義のために国王を求め、ついに亡びの道を歩んでしまった。サン＝シモンは充分このことを知っていた筈である。したがって彼は、国家権力の存在する時代から、ヨハネ黙示録に記されているような国家なき社会に思いを及ぼしたのではなかったろうか。彼はこの世の斗いに本当に神から与えられた武具——才能・信仰——をもって斗える者こそ、ゴリアテに対して勝利を得たダビデの如き指導者となり得る、と考えたのではなかったろうか。繰返し記すことになるが、このことから彼は、神が人類に行為の規範として与えられた原理 (ce principe que Dieu a donné aux hommes pour règle de leur conduite) = 人類が神から受けた道徳原理 (le principe de morale que les hommes ont reçu de Dieu)<sup>16)</sup> に従って、最大多数が最大幸福であり得る社会を組織しようとし、その新しい組織は、宗教的制度と同様に政治的制度

(les institutions temporelles, ainsi que les institutions spirituelles) も<sup>17)</sup>「人類は互に兄弟となって導き合わなければならない」という原理から、演繹しようとしたのではなかったろうか。彼はこの原理を「神が教会に与えられた道德の原理」(le principe de morale……, donné par Dieu a son Église)<sup>18)</sup>と明らかに述べ、また、「新キリスト教」の緒言においても「すべて宗教にはその目的として道德がある。」<sup>19)</sup>と記していることから、福音としてよりも道德としてキリスト教を把握している姿が、より鮮明に浮き出ているように見える。

(註)

(9) H. De Saint-Simon: Le Nouveau Christianisme et les écrits sur la religion choisis et présentés par Hanri Desroche p. 144 Édition du Seuil. 1969, Paris  
 ロマ人への手紙第12章10

(10) ibid. p. 180

(11) ibid. p. 142

(12) ibid. p. 150, 151

(13) ibid. p. 163

(14) ibid. p. 175

(15) ibid. p. 182

(16) ibid. p. 145, 146

(17) ibid. p. 147

(18) ibid. p. 175

(19) ibid. p. 142

## 5. 一解釈一福音的思考

それではサン＝シモンはキリスト教を道德としてだけ把握し、福音として全く把握していなかったであろうか。「新キリスト教」を通して見る限り、残念なことではあるが、「福音」(évangile)という文字は皆無といって差支えない程見当らない。「福音書」(Évangile)という文字が一、二ヶ所出てくるにすぎない。それでは彼は、イエス・キリストの十字架上の死による人類の救いへ考えを及ぼさなかったのであろうか。永遠の命の約束を肯定したのか否定したのか。わたくしは彼の言葉の一端から福音的思考を類推したいと思う。

先にも記したところであるが、彼は甥に宛てた手紙の中で神信仰の告白をし、また、「新キリスト教」の対話の中で、保守主義者から教会を一つの神聖な制度として認めるかどうかを問われたときの革新主義者の返答として、

わたしは神ご自身が自ら教会を創り給うたことを信じます。<sup>20)</sup>

と答えさせていることから、神を信仰し教会を承認する姿勢であったことは確かであろう。しかし彼はカトリック教会の在り方に疑問を抱いた。それは権力との結託による「祭司・レビ人」的姿勢に対する疑問と受取れる。彼は、原初の僧侶達はキリストの教えに忠実に振舞い、価値

のないものにも愛を及ぼす働きがあったけれども、カトリック教会の僧侶達は「神自ら告げられた言葉」(ce que Dieu a dit personnellement)を、「僧侶が神の名において言った言葉」(ce que le clergé a dit en son nom)にすりかえて、フランス革命という旧秩序否定の原理にはノータッチの態度で、人類の救いには一切無力化してしまった、そのために多くの民衆に対して「よきサマリア人」とはなれなかった、と解した。そこで彼は、

イエス・キリストは、最も貧しい階級の生活の改善に、精神的関係において、また物質的關係において、よりよく努力した者に永遠の命を約束されました。<sup>21)</sup>

と、カトリック教会を異端ときめつけた言葉の中で、真実のキリスト教を求め福音をキリストに見たのではなかったろうか。カトリック教会の僧侶達は、実は革命の如き無秩序状態に対しては、民衆に神の世界からタッチすべき立場の人物であるべきだった。それが何の救いも示さず、自己の権威は何を根拠としているかの判断を怠ったのである。

キリストの福音を啓示されたサン＝シモンは、その応答の途として、

智的方法のすべてをあげて、またその才能のすべてをあげて、ふるまわなければなりません。なぜかといえば、神はすべての人類を、富めるものでさえも、自分の子として見られたからであります。<sup>22)</sup>

と説き、この実践として「人は互に兄弟として導き合わねばならない」と考えたのではなかったろうか。

サン＝シモンは福音を忘れたわけではなかったと思われる。しかし彼は啓蒙家であり思想家であり社会学者であって、神学者でも牧師でも僧侶でもなかった。それは、福音に預っていることの感謝から出る愛の実践を口にしていないからである。本当に人間を愛することが永遠の命から来るものであることは把握していた。したがって、「わたしの隣り人は誰か」<sup>23)</sup>とは問うことをしなかった。「わたしが隣り人」になることを訴えたのは正しかったと思う。いわゆる福音の応答としての客体を自己に求めることなく、主体は誰であるかを問い、主体はわれわれであることを強調したことは正当ではなかったか。彼はその主体の根拠は何かを問いつめて適格に把握していたと思われる。だから永遠の命から来る愛を彼なりに人類の福祉と受取り、愛への応答の生として互に愛し合い、兄弟として導き合うことを求めたのではなかったろうか。

サン＝シモンは自己のおかれている全体の状況が判るよう眼を開かれていた。したがってこの世が危機に入っていると感知したのであろう。それゆえに世の人々にも、歴史過程を通して自己のおかれている位置を確認するよう訴えたと思われる。ここから道徳的と不道徳的を区別したと思われる。彼は信仰による正しい価値判断の眼を開かれており、神の知恵に基いて生活することの重要性を認識していたことであろう。しかし、彼が状況判断・価値判断の眼を開かれたことに対する感謝の言葉・表現が「新キリスト教」に示されていないことである。しばしばこの作品の中では道徳は出てくる。福音からほとぼり出た言葉というよりも、やはり冷静に眺めた客観性ある言葉によって、社会学者としての眼からの著作であったといえよう。

(註)

(20) Nouveau Christianisme, ibid. 145

(21) ibid. p. 150

(22) ibid. p. 151

(23) ルカによる福音書第10章29

## 5. 結 語

サン＝シモンが社会科学者であって牧師や僧侶でなく、キリスト教を福音としてよりもむしろ、道徳として取り上げていることを見て来た。福音を忘れ去ったわけではなかろうが、愛の実践として道徳の強調になっていた。しかし彼が社会の認識に科学性を取り入れたことは画期的なことであった。個々の歴史上の現象を各々独立したものとして把握するのではなく、統一ある継続したものとして認識することを明示した。そして因果関係から歴史法則を追求し、ここから過去と現在の解明だけでなく、未来への展望も可能になって来ることを示した。このように歴史の新たな認識方法の扉をサン＝シモンは開き、オーギュスト・コントはこれを引継いだ。サン＝シモンを酷評しながらマルクスは多くを彼から学び、これらを自己のものとして世に問うた。サン＝シモンは多くの非生産者階級の人々を失うよりも、一人の生産者階級の人間を失うことの方が社会的損失が大きい、とさえ言った。彼は社会主義の父である。父であっても唯物論的偏向者ではなかった。キリスト教の温雅で慈悲で誠実である情熱を注ぎ込み、人類救済の福祉を念願した。その信仰と実証を試みようとした。しかし実証の段階において福音的思考より道徳的思考が優っていたと言うべきであろう。